

ラーで踏みつぶされていた光景、その道の側を敗戦して行く先も分からず黙々と歩かされる私ども日本兵の姿（満ソ国境琿春峠）。こんな事が二度と繰り返されないためにも平和な世界をつくって下さい。

抑留記

長野県 中村 良 恵

私は大正十二（一九二三）年十月五日、長野県伊那市に生まれました。

昭和十九（一九四四）年一月十日、現役兵として東部三八連隊に入隊。同月中に北支陣六三師団独立歩兵第二五大隊第三中隊に配属、初年兵教育を受けました。四月より河南作戦参加後、師団は二十年五月に満州に移動するまで河北省全域にわたり移動討伐作戦に参加していました。部隊は満州の通遼に移動しましたが、すぐ承德作戦（万里

の長城内外）に参加。その間の八月八日にソ連軍の進攻を知りました。二日間の強行軍で承德まで出て、そこから汽車で錦州まで行き、日本人学校に入りました。

八月十五日正午、全員整列があり、玉音放送を聞きました。意味は雑音で聞き取れず、部隊は出動命令が出て、汽車で奉天（瀋陽）まで北上して貨物廠に入りました。四日後、ソ連兵が入ってきて、ここで武装解除され、北陵大学に集結させられました。ここには何万人も集められていました。九月初めから千人単位で貨車輸送が始まりました。九月末ごろ黒河に到着、十月初めに対岸のブラゴエシチェンスクに渡りました。再度貨車で移動し、一週間くらいと思いますが、バイカル湖を右に見て着いた所は炭坑の街チェレンホーボというところでした。駅に近い収容所に入りましたが、そこは三千人くらい入っているようでした。

数日後から作業が始まりました。石炭の露天掘りです。三十人くらいの組で一畝区昼夜三交代

で、八時間に六〇トン積み込みがノルマでした。道具は何回も電気溶接で修理してあるため重く、体力のない我々には重労働でした。十二月になり寒さが厳しくなったころ、私も高熱が出て発疹チフス患者の仲間入りとなっていました。病棟には大勢の重症患者がおり、飯、ごうに氷を入れて頭を冷やしているだけで薬もなく、病棟の入り口にいた私は、毎日十人くらいが亡くなっているのを見送りました。幸い私は二週間くらいで軽症病棟に移り、二月末三級となり、炊事勤務を一カ月したおかげで元気になり、炭坑作業に戻りました。

しかし、再度発熱し病棟に入りました。大半が結核患者のようでしたが、患者たちは比較的元気のようにでした。五月に入り患者全員呼び出され診断。翌朝出発と言われました。別の病院へ移送されると思いましたが、翌朝収容所下の引込線に貨車が入って来て、最後尾車両に三十人ほどと乗車。知人は一人もおらず、約十日間くらいでポ

セット港に着きました。数日後ソ連船に乗り朝鮮の清津に下船。再び貨車で出発、着いた所は古茂山という所で、日本のセメント会社のあった所と聞きます。宿舎は防空壕跡で、屋根もなく、ひどいところでした。早速棒を渡し、近くの河原で柳の枝を切り、一メートルくらいの厚さに重ねて屋根らしきものを作りました。もともと病弱者ばかりなので、毎日十人から二十人の仲間が亡くなり、裏の畑から裏山の中腹の方まで埋葬しました。仲間の中に六十人ほど、シベリアにおいて凍傷で脚を切断し、松葉杖を使う人たちがおり、機械化部隊と呼ばれていました。私たち元気な者三十人ほどは、セメント鉱山や収容所のまき切り作業等に一カ月くらいずつ従事しました。

昭和二十一年十二月に入り、貨車で興南まで南下、二十日過ぎころ日本船に乗船、佐世保港に到着しました。復員手続きを経て十二月三十日、郷里に帰ることができました。

帰国後は自営業（豆腐製造）に従事、平成六

(一九九四)年廃業後は野菜作りとマレットゴルフを趣味として元気に暮らしております。

抑留記

長野県 中村 一 登

長野県伊那市日影に大正十四(一九二五)年十一月二十三日出生。

昭和十八(一九四三)年十二月、上伊那農業学校卒業、国鉄に就職する。

家の仕事は養蚕と水田農業、家族は祖母と父母、兄弟五人でした。

昭和二十年三月徴兵(現役)、大阪へ集合した。そこで軍服に着替え、満州から迎えに来た兵隊の指揮下となる。

部隊にあり外部との接触も全くなく、根こそぎ動員という言葉は聞いたことがなかったが、入隊後、朝鮮からの現役兵が入隊して来たということ

は聞いたことがある。装備については鉄道隊などの内務班全員に歩兵銃二人に一つくらいだった。

ソ連軍侵攻。昭和二十年八月九日朝午前一時ごろ、部隊で就寝中、飛行隊の爆音らしき音を聞き、その後若干時間を過ぎたころ非常召集の命令があり、軍装を大至急整えて営庭に整列した。そこで上官から、ソ連が参戦したによって我が中隊は直ちに準備を整えて北満国境に向かって出動との命令が下された。連隊中我が一二中隊だけが八月十二日、北満国境へ向けて出動の命令があり、本部隊と別れることになった。編成は先頭に機関車、物資輸送の貨車、兵員輸送の貨車編成だけである。

戦闘状況について。列車がハルピンを出て黒龍江省黒河の手前、孫呉の街手前に差しかかったとき、敵機の来襲に機関車はじめ一編成と兵員の壊滅的打撃を受け、前進不能となり、部隊もバラバラとなり、北安まで撤退の命令があり翌朝まで線路伝いに歩き続けた。昼間は外に出るとソ連機に